

## かさねの色目 — 1000 年前の配色図鑑

「日本の色彩」第 3 回は、1000 年前の日本の服装と配色についてのお話です。1000 年前の日本は平安時代で、京都にいた「貴族」とよばれる人々が、文化の担い手でもありました。貴族は、天皇に連なる特定の家系の人々で、この人たちが日本の政治を行っていました。貴族が担った文化には、たとえば「源氏物語」のような文学が有名です。一方、服装に関してもファッション文化といえるものが生まれ、「色を組み合わせる」こと、つまり「配色」が行われました。季節や場面に応じたさまざまな配色が考案されて、それらが「かさねの色目」として今に伝えられています。これは、世界で初めての「配色図鑑」ではないか、とも言われています。今日の講義では、まず日本の伝統服装について簡単に説明し、「かさねの色目」について、例を紹介しながら説明します。

### 日本の被服材料と衣装

みなさんは、反物（たんもの）という言葉をご存じでしょうか。図 1 のイラストは、着物を売る店である「呉服店」を表しています。着物姿の女性が持っている、数十センチ幅の帯状の布を巻いたものが「反物」で、それを職人が切って縫い合わせ、着物を作ります。

ところで、反物の幅は、なぜ数十センチ程度なのでしょう。それは、平面状の布を作る「機織り（製織）」の工程に理由があります。

機織りの工程では、まず、縦方向の糸（経糸（たていと））を平行に並べておき、そこへ経糸に直交する方向の糸（緯糸（よこいと））を通して、平面状の布を作ります。図 2 は簡単な機織り機（織機）で、写真の縦方向に経糸が並んでおり、そこに手で緯糸を往復させて通して、布を織っていきます。写真の下側に、布ができてきています。

日本では、作業者の身体の前に経糸を並べ、両手の間で緯糸を通す形式の織機で布が作られていました。これは、緯糸を「飛ばす」機構が発明され、それによって動力織機が実現されるまで続きました。その結果、反物の幅は、緯糸を通す手の届く幅に限られていたのです。

さて、このような帯状の反物を使って着物を作るのに考えられたのが、「直線裁ち」という技法です。これは、着物を構成する各部分を、ほぼすべて直線で構成し、直交する直線を多用することで、反物の



図 1: 呉服屋と反物 [1].

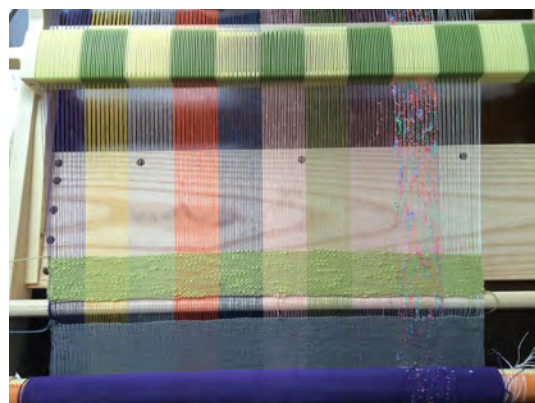


図 2: 布を織る.



図 3: 五衣唐衣裳（十二単） [3].

布を無駄なく使う方法です [2]。なお、着物は、完成して着用したあとでも、各部分に分解して洗い、再び縫い合わせて元の着物に戻すことができます。

直線裁ちの技法で作られたのが、五衣唐衣裳（いつつぎぬからぎぬも）とよばれる、平安時代の貴族女性の衣装です。現代では、十二単（じゅうにひとえ）という通称でよばれることが多いです。図 3 は、五衣唐衣裳（十二単）の例です。現代でも、天皇家の行事では、このような衣装が用いられます。

「五衣唐衣裳」という言葉は、「五衣（いつつぎぬ）」「唐衣（からぎぬ）」「裳（も）」という、衣装の各部分を合わせた名称です。「唐衣」は上半身、「裳」は下半身の後ろ側につける上着です。唐衣の下には、何枚も衣装を重ね着していますが、その中で桂（うちぎ）を 5 枚重ねるようになったことから「五衣」という名称が生まれました。

直線裁ちで作られた衣装を重ね着した結果、写真を見てわかるように、襟や袖口など衣装の縁に、重ねた衣装が層になって見えます。そこで、この層の色の並びを、季節や場面にあわせて美しく彩ることが探求され、それが「かさねの色目」として伝えられてきました。

なお、時代がくだり、より実用的な衣装が主流になるにつれ、当初は五衣唐衣裳の下に肌着として用いられた「小袖（こそで）」が、やがて上着となっていき、これが現代の「着物」の原型になりました。「小袖」という名は、袖口の開きが狭いことからついた名です。

### 平安時代の色彩が、なぜ再現できるのか？

ところで、平安時代に使われていた色彩が、なぜ現代に再現できるのでしょうか？ 1000 年前の繊維材料で、現代に残っているものはありますし、奈良の正倉院には、1250 年前、奈良の大仏が建てられた頃の布が、いまでも保管されています。しかし、長い年月の間には色に変化してしまうため、それを見ても、当時の色彩はわかりません。

現代では、カラーディスプレイのように、いくつかの基本色を自由な割合で混ぜ合わせ、さまざまな色を作り出すことができます。しかし、長い間、色は、自然にある植物や鉱物を材料として、色素を抽出することで作られていました。そのため、作ることができる色は、その材料に依存していました。

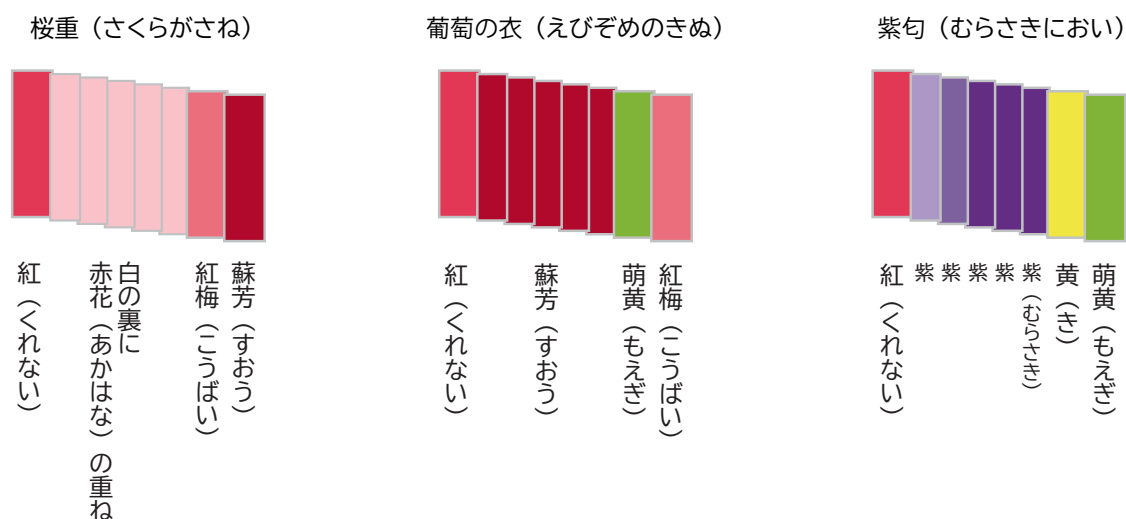


図 4: 春の「襲の色目」の例。それぞれ、右側が外（表）に着的衣服，左側が内側の衣服の色を示す。

しかし、このことは、はるか昔に作られた色であっても、どのような材料で、どのような工程で作られたのかがわかれば、その色を再現できることを示しています。例えば、平安時代の宮廷の規則集である「延喜式（えんぎしき）」には、衣装の色についての規則があり、その色を作るための材料と工程が詳細に記されています。もっとも、当時と同じ材料が手に入るわけではないので、現代に再現される色はあくまで推定ですが、さまざまな研究によって、1000年前の色を再現する試みが行われています。

### かさねの色目

さて、「かさねの色目」の話に戻ります。平安時代の衣装での、層状に重なった衣装の配色を「かさねの色目」とよんでいます。しかし、「かさね」には「襲」「重」の2通りの字が用いられます。「襲」は、図3について説明したように、色の並びによる配色をいいます。一方、「重」は、濃い色と薄い色の絹を重ねて、濃い色が薄い色を通して透けて見えるときの色合いをさします。

「かさねの色目」は、さまざまなものが試されるうちに、「定番」の色目には名前がついて、後世に伝えられていきました。そして、さまざまな儀式といった「場面」、春夏秋冬の「季節」、さらに着る人の年齢によって、それらにあった色目を使うことが、洗練されたふるまいとされました。

文献[4]には、いくつかの文献に記録されている、各季節の「襲の色目」が紹介されています。ここでは、「春」の色目のうちいくつかを、図4に掲載します。これらは、1480年頃に古典学者の一条兼良によって記された「女官飾抄」[5]に掲載されているものです。春というと、現代でいうピンク系統の色が思い浮かびますが、それ以外にも、春の若葉を示す萌黄（もえぎ）色や、紫のグラデーションなど、さまざまな配色があることがわかります。

## 演習問題

参考文献 [6] のウェブサイト（講義のウェブページにリンクがあります）では、各季節の「重ね」の色目が紹介されています。そこにある「春」の色目について、(1) 自分のもつ「春」の印象と一番合っている色目、(2) 自分のもつ「春」の印象と一番かけ離れている色目をそれぞれ選び、その理由を述べてください。

---

\*

### 参考文献

- [1] イラストボックス <https://www.illustration-box.jp> 提供のイラスト。
- [2] 京都・山本呉服店のサイトに、裁断のしかたが図解されています。  
<https://y-yukiko.jp/archives/2758>
- [3] 第10回 武市昌子杯 振袖・留袖・花嫁着付技術選手権 エキジビションにて、TCC00313 - 投稿者自身による作品, CC 表示-継承 4.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=53972024>
- [4] 和の色のものがたり 季節と暮らす 365 色, 視覚デザイン研究所 (2014), pp. 32-33.
- [5] 一条兼良, 女官飾抄, あきの屋金楽による写本 (1821), 国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2539054>
- [6] 有職の「かさね色目」, 綺陽装束研究所 <http://www.kariginu.jp/>